

Our Man in Havana について

—主体性の確立—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2001年9月28日 受理)

I

グレアムグリーンは1941年に英国の Secret Intelligence Service, 一般的に MI 6 と呼ばれる諜報機関に入り, シエラ・レオーネに派遣された。その時期, 彼が調査活動を行った際の費用を植民地が決めた正規の一日 5 シリングの額で請求したところ, 彼のような身分のものが出張した場合は一日 3 ギニーを請求すべきであると指摘されたこと¹⁾。また, 43年から44年にかけて, ポルトガルのドイツのアブヴェール活動において現地の係官が「自分達で勝手にスパイをこしらえ, その実際に存在もしないスパイから得たところの情報を土台に, とんでもない報告書を, 多くの時間をかけてせっせと彼らの本国ドイツに送っていた,」そしてドイツの諜報機関から多額の現金をせしめていた事実²⁾。さらには SIS 自身も諜報ファイルに一枚でも新しいカードが加えられれば, それを何よりうれしがるものだという内情をグリーン自身が知っていたこと³⁾。また, 諜報活動というのは, 利害関係にある相手方の秘密を探り出し, こちらが有利な立場に立てる足場を確立することにある。しかし, 報告される情報が真実かどうかを即座に確認する手段はない。とりわけ秘密性が高ければ, 高いほど, 確認は難しい。グリーンは自分の経験から諜報機関が手に入れる情報というものは, その国にいる人間であれば誰もが知っている事実か, 多分に作為的な情報であることを知っていた。従って, これらの事実から彼は「嘘に踊らされている外務省といい諜報機関といい, 多少は皮肉られても当然, という気がした」という⁴⁾。加えてグリーンが SIS で働いていた当時の上司が, あの有名な KGB と SIS のダブルスパイのキム・フィルビーであったことを考えれば, グリーンは諜報機関が実際に一人の男に手玉に取られる実態をその目で目撃しているのである。この作品, *Our Man in Havana*⁵⁾ の中では諜報機関の上層部が現地の電気製品小売商のワーモールドを手先にし, 彼を操って情報を得ようとするが, 逆にワーモールドのでたらめな情報に彼等が振り回されるあたりは, 彼の経験をもとにして, 諜報機関のばかばかしさ, 無益さを暴露する意図が込められており, グリーンの面目躍如といったところであろう。従って, 彼がこの作品を執筆するに当たって, 英国諜報機関をからかう喜劇仕立てにしたことは一目瞭然であるが, 同時に諜報機関の非人間的, 非生産的な特徴のみならず, 空虚な情報に基づいて暗躍するスパイたちの織

りなす不穏な行動、それを指揮する一部の人間の野心と虚栄心に我々の日常生活の平安と安定が依存していることの危険性を我々が気づかずに暮らしている現実にも彼は鋭い視線を注いでいると言える。

この小論では諜報機関の部長とその部下のホーソーンなどの諜報機関に関係する人物に視点を注ぎ、その非人間的、非生産的な面を明らかにするとともに、グリーン作品にしばしば見られる男性と女性の人生に対する姿勢に注目したい。

II

SISの初代長官は Sir Mansfield Cummingum であり、現在は Sir David Spedding である。情報機関の重要なポストには *Our Man in Havana* の部長のような庶民感覚からも実際の諜報活動の現場からもかけ離れた人物が伝統的にその責任者として就任しているようである。諜報機関とは、国民にすらその実態がよく知られていない組織であり、対立するその相手方のこちらに知られたくない情報を秘密裏に収集することを目的とした機関である。従って、収集した情報が信頼に足るものであるかどうかを厳密に見極める技量が非常に重要なこととなる。そのためには、推測で物事を判断するのではなく、世界情勢に明るく現代社会の実情に精通し、事実に基づいた情報の取捨選択と冷静で且つ理知的な判断力が要求される。何故なら誤った判断を下すと、取り返しのつかない世界的な危機を引き起こすことになりかねないからである。だから慎重の上にも慎重を期すことが望まれる。我々は、20世紀の諜報活動は科学的な技術を駆使してなされているように考えるが、実態は、旧態然とした暗号解読法、通信手段、精査することもせずにてたらしめな情報を鵜呑みにし、情報収集活動に要した多額の請求を簡単に認めるシステム。更に多くの正確な事実にも僅かな推測で脚色された情報が届くのではなく、断片的な事実にも多大の推測を加えた、時には真っ赤な嘘の情報もたらされるのが実状である。それに基づき諜報機関の本部では第一線の現実を知らずしてかくあろうと想像する幻想の世界を推理する。更に情報をもとに心に浮かんだ心理的な不安を固有の形象へと具象化して、そこから力学的な関係を構築し、そして最悪の事態を想定する傾向に陥りやすい。つまり人事を初めとして、諜報機関は全ての点で、Robert Pendleton が指摘するように “an illusory society controlled by habit, ritual bondage, arbitrary law” と言えるのである⁶⁾。その実態を見ていこう。

美食家の MI 6 の部長は、ワーモールドが電気掃除器の内部構造を模写してでっち上げた軍事施設の図面を見て、新型の巨大軍事施設だと信じ込み、その証拠となる写真を手に入れる必要性を自宅での食事に招待したこれまた美食家の事務次官に対し、「『その写真のためなら、一人の男の命どころか、もっと大きな犠牲を払ってもいいと思っています。とにかく、すでに千五百ドルやりましたからな。』⁷⁾と強調する。情報機関の部長は、繊細な料理をこの上もなく愛する人間らしい好みの持ち主であるが、それは彼自身の個人的生活の上でのことであって、個人を離れた職務のうえでは、部下に対しても「『ピアトリス？

どうもわしはあのクリスチャン・ネームで呼ぶのが虫が好かんね。訓練はよく受けとるのかね?』(p. 90) というように個人が特定される family name のみならず、数多い親しみを込めた Christian name を使用することすら嫌い、59200/5 といった情報機関特有の記号として個人を扱うことを強く主張する。こうした事実は彼が諜報員を人間として扱っているのではなく、ワーモールドとセグーラ警視が行うチェスの駒のごとく、一つの役割を担った物体として扱っていることを物語るものである。そこには人間を権力側の思うとおりにコントロールし得るし、国家の安全のためには個人の犠牲は当然のことという傲慢な意思が伺える。だから彼は英国への忠誠、あるいは組織の任務遂行のための情報を得るためには、会ったこともないキューバにいる諜報員に何の人間的な感情も抱かないのは当然のことかもしれない。しかし諜報員として働いている個人にも生活があり、家族や恋人があるかもしれないことを、あるいは生きておれば、経験するであろう喜怒哀楽を彼の判断が断ち切ることの残酷さ、その非人間的な行為を全く理解していない。彼には個人が集合し社会や国家を形成しているが、個人は社会や国家と同じ重みを持っているのであって、個人あつての社会であり国家であることが認識されていない。従って彼が机上で想定し、指令する諜報活動は、現代の子供たちがパソコンを使用して virtual なスパイゲームや格闘ゲームを楽しんでいるのと本質的に変わるものではない。また、部長には物事を額面通りに受け取らず、勝手に思いこむ癖がある。彼はホーソーンからワーモールドが現地に居るイギリス人の商人であると聞かされると、彼はワーモールドを勝手に世界の果てに出かけていき、孤軍奮闘して商売に精を出している19世紀の旧式の貿易商人だと夢想している。そこにはワーモールドがいう経験に根ざした先入観に基づく判断がなされている。

「……その男の生活は、いろいろな女が現れては消えて行ったろう——女なんてものは、仕事にくらべては一度も大きな意味を持ったことのない男らしいね。諜報員をうまく使う秘訣は、人物をよく理解することだよ。われわれのハバナの男は——まあ言わば——キップリング時代に属しているんだ。数代の王朝とともに歩み——それから何だっけな?——美德と、友と、平民的気質とを失わず——だ。きっとその男のインクで汚れたデスクのなかには、その男の最初の取引勘定を記入した黒革の古い出納簿がしまつてあるだろう——消しゴム四分の一のグロス、鉄ペン六函……」(p. 54)

しかも経験から学んだ結果が固定しており、どのような結果ですら時とともに、時代とともに限りなく変化していることに気がついていない。つまり彼には後生大事に考えている国家という意識そのものが生存競争を勝ち残るために国民を奮い立たせる古い観念的な政治形態であることが認識されていないのである。現代社会は国家間の対立を強めるような国家意識を持つのではなく、国家間の対立や距たりを取り払い国境のない新しい世界を形成する時代なのである。つまり、国家が主役ではなく、人種や国籍に囚われない個人が主役になる時代が来ているのである。そうした時代の変化が理解できない精神的に未成熟な

大人子供は、国家の命運を左右しかねない重要な部署の長としては相応しくない。現実をしっかりと認識することもできず、現実離れした想像力を働かせ、真剣になって、その勝手な推測で金と国家的な秘密組織とを利用して一つ間違えば戦争を引き起こしかねない諜報活動を指揮するのであるからこれほど危険なことはない。その危険性を Graham Smith は次のように述べている。

He is thus assigned, even physically, to an infantile realm of activities which are meaningless and yet amply capable of inflicting suffering.⁸⁾

この事実を確証する部長の人間の本質を示すものがその義眼——「眼鏡の奥からあらわれた眼はガラスの義眼だった。薄青い、頼りなげな、“ママ”と声を出す人形からでも持ってきたような眼だ。」(p.47)——に象徴されている。

部長と同じくこの virtual な世界に属する人物がワーモールドの直接の上司であるホーソーンである。彼の小粋な服装、芝居がかった用心深さはコミカルであると同時に、彼も部長と同じく庶民的な生活感覚はなく、諜報活動というゲームに従事していることを楽しんでいるようである。彼の現実離れした生活感覚は彼自身も虚構の世界に生きていることを示すものと言えるだろう。彼がワーモールドを諜報員に選択した理由は、ワーモールドがその地にたまたま居座っていたことと、英国人であるから英国に対して忠誠心を持っていると確信したことなのだが、その確信に至る過程の軽薄さと無神経さにはただただ呆れるばかりである。彼がワーモールドを信ずるのは、国家や組織の価値観の方が個人の価値観に勝ると信じている村落共同体的閉鎖社会の人間だからである。部長はでたらめな軍事施設の図面をワーモールドから手に入れたホーソーンを「『おい、ホーソーン、今度のことについては、大いに君の努力に負うところが多かった。一度わしは他人から、君の人間に対する判断がなってないと言われたことがあるが、わしはわしの個人の判断を頼りにした。よくやったぞ、ホーソーン』」(p.91)と褒めてはいるが、部長の言葉からもこれまでもホーソーンは英国におけるその筋の専門家にもあまり信頼されていないように考えられる。このことはこの二人が如何にいい加減な人物であるかということと、諜報機関の本質とはこの程度のものであることを暴露するものである。

ワーモールドは、愛娘、ミリィの学費を稼ぐため、多額の金を引き出す目的で腕利きの諜報員の役割を演じ、実在の人物の名前を借りて多数の部下を作り架空の軍事施設の建設話をでっちあげる。彼の行為は、個人の価値観は総てに勝ることを示す行為で、価値観の逆転が喜劇を生み出しているのだが、その根底にあるものは、国家が個人に勝るとする既成観念を信じて疑わぬ人々の鼻を明かす痛快さである。彼自身はゲームを楽しむ気分で、「『もしそれが十分に秘密のものなら、あんた一人しか知らないわけだ。あんたに必要なのは、いささかの想像力を働かせることですよ、ワーモールドさん』」(p.66), 「『……

ワーモールドさん。やつらの金を受け取るのはいいが、その代償を何も与えてはだめですよ。……嘘だけついて、あんたの自由を確保しなさい。やつらは真実を与えるに値しない』(p.67) というハッセルバッヒャ医師の哲学めいた忠告を守って架空の話を展開させるが、諜報活動はあらゆる国があらゆる国で展開していることである。従ってワーモールドの架空の話は英国諜報機関だけの枠の中に収まっているものではない。「冗談とかいたずらというものには、つねにもう一つの反面があるのだ——その犠牲になるものの立場が」(p.83) あるということを忘れている。彼の電気掃除器を模して描いた建築中の軍事施設という想定図面は秘密裏のうちに他国の諜報機関の手にも渡り、でたらめな情報をもとに闇の世界では活発な活動が繰り広げられ、敵側とおぼしき陣営に加えてハバナの警察当局まで暗躍し、全く無関係のハッセルバッヒャ医師宅の電話の盗聴、搜索、医師への脅迫そして殺害、ラウールの事故死、さらにはワーモールド自身の殺害未遂事件を引き起こす。ここに我々は、国家や行政機関がプライバシーを侵し、個人情報を一元的に管理しようとする公権力の恐怖を垣間見るのである。諜報活動の中での脅迫や殺戮は、誰もが理解できる個人的な増悪や遺恨、利害関係や感情のもつれなど、言うならば、人間的な動機が原因で引き起こされるものではない。脅迫され殺されたハッセルバッヒャ医師とラウール、そして彼らを殺した人物との間には面識もなく、狙われるべき理由もなければ、殺したい憎悪もなく、何らの個人的関係も存在していない。従って、「殺せ」という指令を受けて、何の感情も伴わず、ごく事務的に忠実に実行されるその殺人行為は、脅迫する側とされる側、殺す側と殺される側との間に必然的な因果関係が存在しない非人間的で無機質な行為なのである。このような無意味な殺人の動機がワーモールドの人間的な余りにも人間的な殺人の動機——ワーモールドの人間性の回復と自己確認の動機付け——と対比され、組織的な殺人の残酷さが強調される。医師を巻き込み、殺害することは、最も大切にされなければならない個人の自由と権利を圧迫する組織権力の恐ろしさを象徴するものである。ワーモールドはハッセルバッヒャ医師と彼の命を狙ったカーターを殺害する動機を次のように述べる。

ワーモールドは自分に向かって言った。少なくとも、おれがあつた男を殺せるためには、おれはきれいな理由で殺したい。人を殺すなら、次には自分が殺される番だということになれば殺せないということを示すために殺したい。おれは自分の国のために人を殺さん。資本主義や共産主義や社会民主主義や福祉国家のために——福祉とは誰の福祉だ？——おれは殺さん。おれはカーターがハッセルバッヒャを殺したが故に、あいつを殺す。血族の争いのほうが、愛国心や、一つの経済体制をほかのものよりもひいきにすることよりも、人殺しの理由としてはまさっている。もしおれが愛するなら、もしおれが憎むなら、個人として愛し、個人として憎ませてくれ。どこの誰とも知れぬやつらのやる世界戦争で、59200/5 になるのは、おれは厭だ。(p.207)

一般的な現実の世界で暗躍する諜報機関が virtual な世界を現実の世界に取り込み、虚構の

世界と現実の世界との境界を交錯させ、闇の世界を生み出している。その結果「世界は、ああいう通俗雑誌をモデルにしてつくられるんですわ」(p. 135) という印象を強く与えるのである。そしていろいろな組織の ‘Espionage appears as a game played with little grasp of reality and with a fantastical rigour for the drill and rules of secrecy.’⁹⁾ まさにそれは劇画の世界であって、‘The only element lacking in that world is the genuine.’¹⁰⁾ ということになる。そしてその典型が暴力的な世界の組織を守るために『もし行かなかつたら、何かあるんじゃないかと怪しまれる。これはおれの下部組織を危険に陥れることだ。われわれは諜報網を護らねばならん』(p. 179) とワーモールドを彼の暗殺が計画されている午餐会に出席させようとするホーソーンの人命を全く無視した非人間的な行為である。一人の人間の命と情報網とを比較することすらナンセンスである。にもかかわらず、不確実な情報をもとにそうした活動にどれだけの無駄な費用と時間と人命が浪費されたことだろう。そしてその原因となっているのが、丁度ファストクリーナズとニユクリナーズの両クリーナー会社の内部にいる数人の人間の野心が闘争心をあらわにし、両者の販売競争を生み出しているように、諜報機関に関係する数人の愚かな人間の気まぐれと猜疑心が冷戦と危機を生み出しているということなのである。そこには何ら建設的なものではなく、非生産的な面のみが強調されているようである。

「……例を“ファストクリーナズ”と“ニユクリナーズ”にとりましょう。両社の機械のあいだの相違は、二人の人間のあいだで、一人がロシア人またはドイツ人で、一人はイギリス人であるという相違ほども距たりはありません。両社の内部にいる数人の者の野心さえなかつたならば、競争も戦争も生まれなかつたでしょう。わずか数人の者が競争を命じ、さまざまな危機を醸成し、カーター氏とわたくしとに生命がけの争いをさせるのです」(p. 197)

そしてこれらの諜報活動による結果は互いの敵対心と不信感、無益で非人間的な殺戮と非生産的な破壊だけを残すのである。まさに諜報機関とは非人間的、非生産的な機関以外の何ものでもない。ワーモールドは言う。『生きるって、こんなもんじゃない。スパイというこの仕事さ。いったい何をスパイするのだ。誰でもみんな知っていることを発見する秘密諜報員なんて』(p. 113) そしてこの機関のそうした非人間的、非生産的な特性を象徴するものが英国諜報機関の本部であり、部長であると考えられる。

部長の黒いモーニング・コート、黒いタイ、左の眼を隠している黒い片眼鏡、^{モノクル}それらはこの人物に葬儀屋のような印象を与えていて、そういえばちょうどこの地下室も、地下納骨堂、宗廟、墓窖といった感じである。(p. 51)

更にこのような諜報活動の世界に関する否定的なイメージはハッセルバッヒャ医師の「アパートは埋葬を待つ人のような装いをととのえ直されていた。」(p. 124) そしてワーモールドが店のドアを開けたとき、「入り口へさしこむ街灯の光が、墓石のようにあたりに

立っている電気掃除器のすがたを朦朧と照らした。」(p. 131) などの諜報機関と意識的にあるいは無意識的に関わった人物の住まいの暗いイメージによってさらに強められている。

部長やホーソンと同じようにミリイも神やお祈りの効力といった架空の世界を信じたり、ワーモールドの再婚については否定的な考えであった点では因習に囚われたロマンティックな娘という印象があるが、彼女の世界の方が殺伐とした諜報活動の世界よりも他愛ない無垢の世界である。彼女の世界は幼い子供たちが大人へと成長する過程で誰もが経験する成長の一過程であって、実生活の大切な一部であるといえる。それに引き替え「ホーソンやその一党も妄信の点ではひけをとらないが、かれらが鵜呑みにする事柄は、みんな悪魔だ、S・Fまがいの怪奇物語ばかりだ。」(p. 83) つまり、彼等、男達は現実に足をしっかりと踏ん張って生きているのではない。彼らの世界は *insane or absurdity* な世界で、*reality* が無いといえる。従ってワーモールドがミリイとホーソンの世界を比較して「ワーモールドは、彼女の言うことにはみんな一理あるような気がした。残忍でわけのわからない“子供の世界”に属しているのは、ホーソンのほうだった。」(p. 50) という印象を持ったのも当然のことである。何ら進歩のない大人子供の部長やホーソンと対照的にミリイは着実に人間としてまた女性として成長している。何故ならば彼女は、激しい革命活動が繰り広げられており、一旦、事変が起こったら、抑圧されていた民衆の反感が集中しそうな独裁国家の警察署長であるセグーラ警視は夫にすべき男ではないこと、また父親の再婚を認め、ベアトリスと父親との関係を目撃したドゥエンナとおぼしき老女のことをワーモールドに「『かまわないのよ、あのお婆さんも、あれで人生について少しは学ぶところがあつたわ』」(p. 240) と大人の女性に成長した口ぶりで話す。ワーモールド自身も彼女が大人になっていく実感を強く抱いている。

セグーラ警視が結婚申し込みをして以来、ミリイのドゥエンナは姿を消してしまつたが、その消失の後も、トマス・アール・パークマン二世に火をつけた子供は——父親は再会を望んでいたにもかかわらず——一向に帰って来なかつた。ミリイは両方の性格から同時に脱して、大人になってしまったかのようだ。
(p. 230)

実生活にしっかりと足を踏ん張り、現実を正確に把握しているのはミリイだけではない。諜報機関の本部よりワーモールドの部下として派遣されたベアトリスもそうである。彼女の夫のピーターは部長やホーソンと同類でユネスコという組織の活動に夢中になり、ベアトリスとの個人的な幸せを、実生活を省みようとはしなかつた。つまり、ワーモールドを筆頭に男達は、「『きみはもっと夢を見るべきですよ、』」(p. 13) というハッセルパツヒャ医師の言葉に魅せられ、夢をみているようであるが、夢は現実を無視したもので非常に危険であるといえる。一方、彼女にとって社会が個人や家庭から成り立っている

のであれば、社会のもっとも小さな構成単位である個人や家族の幸せを無視して、より大きな社会の幸せなど考えられないのである。従って彼女は男たちが個人の幸せを犠牲にして大義名分を錦の御旗に掲げることへ強い不信感を抱いている。

「……あたしは人民から報酬をもらって人民に忠誠をつくす人間、組織に忠誠をつくす人間なんか、ちっとも好きじゃないわ。……祖国だって、それだけの意味があるとは思わないわ。あたしたちの血のなかにはたくさんの国家があるんじゃない？——だけど人格は一つだけよ。もしあたしたちが国家に対してでなく愛に忠誠をつくしていたら、世界はこんなひどい混乱に陥っているのでしょうか？」(p. 211)

彼女の言うとおりに、キューバの mulatto、フランス系イギリス人のペアトリスなど考えてみれば、純粋な人種などこの世にはいない。西側も東側も関係のない cosmopolitan なハッセルバッヒャ医師、数時間であらゆる国に行ける航空網。今や世界は一つの社会であって、国家や偏狭な主義などを声高に唱えることすら時代遅れである。彼女に言わせれば、諜報活動などに夢中になっている『『阿呆はあの連中だわ』』(p. 227)ということなのである。彼女の方が男達より遙に現実的であり、個人の大切さ、人間として生きることの大切さを認識している大人である。そしてワーモールドがロンドンへの諜報活動の報告がすべてでたためであることを打ち明けたときも彼女は平然として次のように言っている。

「バカに見えるのはロンドンだわ。それからヘンリー・ホーソーンだわ。もしピーターが、一度でも——ただの一度でもユネスコをバカにしてみせてくれたら、あたしがあの人と別れたとお思いになる？ ユネスコは神聖だったのよ。文化会議も神聖だったのよ。あの方は決して笑わなかったわ……あなたのハンカチを貸して頂戴」(p. 210)

それどころか彼女はワーモールドに諜報活動の愚かさを問いただす。

彼女は言った、「他人が危険なことをするのを見ていて、いやにおなりになることはないのですか？ いったいそれは何のためなの？ 《男性自身》^{ボイス・オブ・メン}のゲームのため？」

「ゲームをやっているのはきみだよ」

「あたしはホーソーンと違って、そんなもの信じてやしないのよ」彼女は激しい語気で、「あたしは阿呆や世間知らずの子供になるくらいなら、気がいいになったほうがいいわ。あなたは電気掃除器のほうで、こんなことから縁を切れるだけのお金が稼げないの？」(p. 123)

彼女は諜報活動が象徴する男社会の制度や組織、忠誠心や愛国心といった偏った観念が生み出したセクト主義、国家主義といった非現実的、非生産的な社会を否定する。また、ミリーの誕生パーティーで自分の威厳をひけらかすセグーラ警視にも故意にソーダ水を吹きかけるなど決して権威を恐れない。彼女は、個人個人が自分の人生と幸せを真剣に考えれ

ば、それが自然に連鎖的に関連しあい、生きることの真の意味が成就すると考えているようだ。だから彼女は諜報機関で自分の仕事に対する責任を果たすためにてきぱきと働いているが、それは彼女の生活を enjoy するお金を手に入れる手段にすぎないのである。彼女は男達の観念や主義に囚われた偏狭な姿勢に対して「『……あたしには、“家”よりもおおきなものは信じられないし、“人間”よりも漠然としたものは信じられないわ』」(p. 239) という。彼女こそ固定観念や権威、社会規範、愛国心、道徳観といったものに拘束されず、自分の理性と感情に忠実に生きている点で真の意味での自由人であり、ワーモールドが言う経験に学ばない道化の生き方に近い存在である。すなわち経験に学ばない道化は不変で永遠の存在なのである。

This clown, because of his permanent act of comedy, goes through life unchanged by the various political waves or the age's great catastrophes or discoveries. In other words, the clown endures because of his ageless and somewhat anarchic farcical behavior.¹¹⁾

彼女は彼女を取り巻く男達や環境に左右されることなく、彼女独自の基準に従って人生設計が行える純粋な存在である。

III

グリーン作品では往々にして、*The Third Man* のハリー・ライムや *The Quiet American* のパイルのように、男は単純な子供っぽさ、ロマンティックな資質を備え、現実をしっかりと認識できずに不幸な出来事を引き起こしたり、悲劇的な結末を迎える。*Our Man in Havana* においても国家機関の要職にある人物は非凡な才能を備えているように考えられがちであるが、実は彼らは凡庸な精神の持ち主である故に既成観念や規範、道徳律や社会通念に縛られているのであって、これは彼らの俗悪さ、役立た無さ、不必要さを明らかにしている。一方、社会の片隅で、あるいは組織の末端で誠実に働いている *The Quiet American* のフォングや *England Made Me* のケイトそしてベアトリスといった女性は、男性達の精神的な支えとなっており、根を真実という大地に十分に張って堂々と立っているからどのような嵐が来ても自分は揺らぐことはないということを自分にも他人にも納得させる資質を備えている。つまり、一見、平凡に見える女性達には自らの掟を作り、いかなる既成観念にも規範にも囚われることなく置かれた環境において柔軟に対処しえる非凡な、あるいは偉大な理性と感性が備わっている。

考えてみれば、安定した社会秩序、国家の安全を確保するために努力する男達は、実は既成観念や古い価値観に囚われて、国家や社会に危機をもたらす元凶となりうる可能性を多分に秘めている。逆に個人の生活、幸せの追求を最も重要視する女性は非情に弱々しい存在で、時としてその主体性までもが踏みにじられる危険性に常に晒されている。しかし弱い女性が無意識的に連合して共同体を作り、既成の社会理念や規範などに頼らない独善的な生き方を追求することが安定した社会の形成に貢献しているというのは逆説的に正し

いといえるのかもしれない。

個人の権利や主体性を護ろうとしたのが社会の始まりである。それはあくまで個人の権利や主体性を護ることが目的である。社会が個人の主体性の確立と幸福の追求への手段として役立っている限り、社会は生産的であり、且つ人間的であり続ける。言うならば、社会の組織は個人のために存在するはずであった。それがいつしか社会という組織を維持するために個人の主体性までも制限し、時には踏みにじる事態にまでなったのは、組織を支配する権力を持つ者が、それを維持するために新たな価値観を創造したことにある。すなわち個人は組織を構成する一員であり、組織によって保護されているのであって、組織なくしては個人の存在はあり得ないという価値観の逆転である。そうすると各社会、あるいは組織の権力者は、彼等の組織を維持しようとするために、そこにセクト主義を芽生えさせ、存在する社会組織間に対立、増悪、敵対心を生み出すのである。その結果、社会、すなわち組織体がそのものを維持するために人間を道具として利用することは、人間の尊厳と主体性を無視した行為で組織そのものが非人間的、非生産的にならざるを得ないのである。

個人の権利と主体性を護る共同体であれば、多くの共同体が共にその個人の権利と主体性を維持するという大きな目的のために連合し合い、最終的には国境も、人種主義も、イデオロギーも超越した一つの大きな人間社会を実現できるはずである。そのような個人の権利や主体性を尊重した生き方を実行する個人が形成する社会こそグリーンがあこがれた社会ではないだろうか。

注)

- 1) 高見幸郎 訳、『逃走の方法』（東京：早川書房，昭和60年）p. 90
- 2) 『逃走の方法』p. 220
- 3) 『逃走の方法』p. 220
- 4) 『逃走の方法』p. 229-30
- 5) Graham Greene, *Our Man in Havana* (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1984)
- 6) Robert Pendleton, *Graham Greene's Conradian Masterplot* (London: Macmillan Press LTD, 1966), p. 146
- 7) 田中西二郎 訳、『ハバナの男』（グレーム・グリーン全集15）（東京，早川書房，昭和59年）p. 163以後本文中の引用はこの本による頁数のみを明記する。
- 8) Graham Smith, *The Achievement of Graham Greene* (Sussex: The Harvester Press Limited, 1986) p. 142
- 9) Maria Couto, *Graham Greene: On The Frontier* (London: Macmillan Press LTO, 1988), p. 176
- 10) Jeffrey Meyers, ed., *Graham Greene: A Revaluation New Essays* (London: The Macmillan Press LTD, 1990) p. 168
- 11) Georg M. A. Gaston, *The Pursuit of Salvation: A Critical Guide to the Novels of Graham Greene* (New York: The Whitston Publishing Company, 1984) p. 73

On Our Man in Havana
–Establishment of One’s Subjecthood–

Toshihiko UEKI

Faculty of Liberal Arts and Science for International Studies,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 28, 2001)

The men in *Our Man in Havana* try to make sure of the stability of society in which they live and maintain its public orders, but owing to their fixed idea and old value system in their narrow-minded way of thinking about society or a state, they sometimes keep a germ to become a prime mover to produce a dangerous situation to their society, because those men apt to encourage a prejudiced sectionalism and nationalism among many races and countries in the world. Consequently they conflict each other to gain supremacy over others. So we can say the world where these men participate actively is nonsocial and unproductive.

While women who pursue their personal happiness and attach importance to their own way of life are apt to be thought as egoistic and exposed to a danger that are their personal dignity and independence trampled down. But it may be paradoxically said right that vulnerable women, who live their own way of life not depending on ordinary social idea or its standard and therefore cooperate so as not to conflict with each other without being aware, contribute to build up a peaceful and stable society because their world, not conflicting and anti-sectionalism, is more social and productive than that of men.